

分担研究

□「川崎病心血管後遺症の追跡、管理」に関する研究班

加藤裕久

本年度の研究計画は、調査研究として、川崎病における γ -グロブリン療法に関する全国アンケート調査。重点研究課題として初年度にひきつづき

1) 心血管病変の病態および管理に関する研究、
2) 川崎病における血栓の病態、診断、治療に関する研究、3) 心血管病変の病理学的研究、4) 外科的治療に関する研究、をあげた。

1) γ -グロブリン療法に関する全国アンケート調査

川崎病の冠状動脈瘤の発生率を γ -グロブリンが有意に抑えることが、いくつかのコントロールスタディで証明され、この治療法が広く一般医療機関で利用される機運にある。そこで現時点における γ -グロブリン療法の実態を、全国各地の基幹病院で川崎病診療の経験の多い384施設にアンケートを送り調査した。これによると川崎病の全例もしくは一部の例に γ -グロブリンを用いている施設は約80%であり、かなり広くこの治療法が実施されていることが分かった。しかしその方法や用量は施設でまちまちであった。冠状動脈瘤は9.4%に出現していたが、従来のアスピリン療法に比べ明かに低値であった。しかし巨大冠状動脈瘤も1.9%にみられ、完全にその発生を阻止できなかった。ただそのうちの約1/3例は小量投与であり、投与開始時期が遅いと思われるものが見られた。

また、発熱、低血圧、浮腫などの副作用がわず
久留米大学小児科

かであるが経験されている。死亡例は9例に見られたが、 γ -グロブリン投与と因果関係が有りそうだと判断されるものは見られなかった。

今回の調査で、川崎病に γ -グロブリンがすでに広く使用されていることが分かり、今後さらにその傾向が強まることが考えられる。しかしその方法や用量はまちまちであり、今後早急にこの治療法の適応、方法、用量などの規準化が望まれる。また副作用も皆無ではないので、それらの病態分析や予防法などの検討も必要と思われた。

2) 心血管病変の病態、管理に関する研究

冠状動脈瘤発生の予知に関し、今までにいくつかの試みが発表され、今回も違った視点からのアプローチがなされたが、いまだいろいろと困難な問題があるようである。冠状動脈瘤の長期フォローアップにより、動脈瘤の消退(regression)が2年以内に起こり、それを過ぎると不変ないし狭窄性病変へと進展する可能性が高いことが示された。これらの経過観察は従来、心エコー図や血管造影でおこなわれたが、MRIによる観察が報告され、特に血栓形成などの早期診断に有用ではないかと考えられる。

心筋のviabilityに関する研究は少ないが、タリウム心筋シンチによる仮死心筋についての評価が報告された。乳幼児の心筋の虚血に対する反応に関してはほとんど分かっていないが、川崎病に

よる虚血病変の予後や、手術適応を考慮するうえで重要な問題である。

3) 血栓の病態、診断および治療に関する研究

巨大冠状動脈瘤内に発生する血栓形成の診断は、フォローアップする上で重要であるが、断層心エコー図による評価に関し、血管造影で完全閉塞の例で血栓が診断できなかった例の報告があった。われわれの検討では、新鮮血栓は断層心エコー図のほうがむしろよく血栓を診断できるが、器質化した血栓は評価できないこともあるという印象もっている。

血小板凝集能や凝固系の検索で川崎病発病後1年以上たった例にもこれらの異常が続いていることが示され、抗血栓療法をいつまで続けるかや、動脈硬化への進展の問題などと関連して興味ある観察である。

アスピリンの投与量に関しては、わが国では30~50mg/Kgが一般に用いられているが、アメリカでは100mg/Kgの大量がしばしば用いられている。今回30mgと100mgのコントロール研究が示され、両群間に臨床症状や冠状動脈瘤の発生率の差はなかったが、大量群に6-keto PGF 1α の低値を示すものが多く、抗血栓療法の面からは少量の方が

適当と考えられた。

4) 心血管病変の病理学的検討

冠状動脈瘤形成のない例にも血管炎があるだろうということは、臨床観察などから想像されているが、病理学的にどうかは検討がなされていない。今回そのような例にも血管炎があることが示された。また川崎病の肺動脈における病理学的検討では、筋型肺動脈の変化は少なく、癒痕を残すことなく治癒することが示された。

5) 外科的治療に関する研究

外科的治療の適応に関してはまだ十分なものはないが、一応、本研究班による指針がある。長期の心機能、運動負荷、心筋センチの検討から手術適応はもっと慎重にすべきであるとの報告がみられる。この問題に関しては、前にも述べたように、小児心筋の虚血に対する反応性や修復機転、側副血行路のできかた、冠状動脈閉塞のできかたやそのスピード、その他多くの成人と違った問題があり、今後ぜひ検討を進めなければならない問題である。また外科治療を受けた例の長期観察が報告された。また冠状動脈瘤内膜摘除術という新しい方法も示された。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



本年度の研究計画は、調査研究として、川崎病における r-グロブリン療法に関する全国アンケート調査。重点研究課題として初年度にひきつづき 1)心血管病変の病態および管理に関する研究 2)川崎病における血栓の病態,診断,治療に関する研究,3)心血管病変の病理学的研究,4)外科的治療に関する研究,をあげた。